

特 集 古民家再生

明治時代から戦前にかけて建てられた日本家屋には、現在では容易に手に入れることのできない太い柱や、ケヤキなどの高価な材料が使われていました。これらの材木は、十分乾燥し、木材特有のねじれなど既に解消されているため、その材料を使用して（あるいは枠をそのまま使って）新しい家を建てるのが静かなブームとなっています。そこで、今回の特集は、古民家の再生と今後の展開について簡単に解説します。

古民家とは・古民家には、農村民家、都市民家があります。”くど”や”いろり”の煙で、燻された材料には得難い色調があり、その地域の気候風土を考慮した屋根形状や壁の造り方、また、柱・梁に利用される木材の特性を巧みに活かした空間の豊かさが残っています。およそ築年数、100年からのものです。

使用されている木の種類・多種多様で、クリの土台、ケヤキ・クリ・シイノキ・カシ等の堅木の柱、アカマツの3間通しの差し鴨居や小屋梁、カツラの牛梁、サクラ・オニグルミ・エンジュ・イタヤカエデの他、その地域で産出される素材が活かされながら使用されています。古い家を解体してみると、これらの材料のすべてが新たに用意されたのではなく、以前の建物や他からの部材（古材）の転用もある場合があります。

古民家を活用する方法・軸組をそっくり利用できる程、良い状態で残っている古民家の場合は、多少の部分補修を加える事で移築することもできます。座敷や居間などで大黒柱や梁などの構造材が立派でしっかりしている場合は、ある部屋を囲む骨組みのみを移築する方法も考えられます。また、建物を残すのには傷みがひどすぎる場合でも、それらの部材を削り直したり、新しく差換えたりすることで利用できます。大黒柱や差し鴨居など大断面の材は削りなおして利用し、建具や欄間などで優れた物はそのまま活用もでき、スス竹などは価値が高くなっています。

古民家を活用する場合の利点・使用されていた材は樹齢が200年を越える物も多く、完全に乾燥している上、強度も充分あるので 現在流通している若木の未乾燥材などとは比較にならない良材を使えることにあります。また、現在では入手が困難な大断面を利用した、梁などを幾層にも重ねた小屋組などで構成された空間も再現できます。建具などの造作物には、手入れのされた素晴らしいものも多く、一つの文化として使用し続ける価値は高いと考えます。

古民家を活用する場合の注意点・まず、目的が明確にされ事前の調査が十分になされていることが前提となります。全体移築や改造に耐える部材か、仕事の程度はどうか、単に古材の部分的な利用なのかなどの点を検討することが大切です。古民家の木組は『総持ち』の構造で構成されている為、部分的な利用や一部をカットして用いる場合には、構造的なバランスや補強の再検討が必要となります。価値ある部材を譲り受けるため、経済性は高いが、解体費・調査費・部材保管費・運搬費など新築工事にはない経費が必要となり、特に再利用を前提とした解体費（調査・保管費は別）が坪当たり8万円以上はかかると考えた方が無難です。このあたりが材料費と相殺できればコスト的なメリットもあります。



再生した古民家の例・打越地区に、リフォームによって改装された家はありますが、ここでいう古民家の再生事例はありませんが、名古屋市内にはレストランに改装された古民家の例があります。（情報はご確認下さい）

りきゅう母屋（お好み焼き）	・名古屋市緑区鳴海町字赤松 11-204	052-877-8441
ジャパニーズダイニング よこ田（和食）	・名古屋市千種区高見 9-29	052-757-8200
サローネ・ディ・カナメ（イタリアン）	・名古屋市瑞穂区松月町 39	052-852-9100
桜喰亭（和洋折衷）	・名古屋市瑞穂区初日町13	052-833-2471
セレスティ（フレンチ）	・名古屋市瑞穂区松月町3	052-852-6660

古民家再生についての情報は、**日本民家再生リサイクル協会のホームページ**(<http://www.minka.gr.jp/>) に詳しく出ています。